古今和歌集

出典

▼底本

新編日本古典文学全集「古今和歌集」（小沢正夫・松田成穂校注、平成六〔一九九四〕年、小学館刊）によった。

▼成立

二十巻、約千百首から成る、最初の勅撰和歌集。醍醐天皇の命を受け、紀貫之・紀友則（きのとものり）・凡河内躬恒・壬生忠岑が撰進した。少数の長歌、旋頭歌の他は全て短歌。巻首に貫之作の仮名序、巻尾に紀淑望（きのよしもち）作の真名序を置く。成立に関しては、序文に見える「延喜五（九〇五）年四月十八日」という日付が手がかりになる。すなわち、そこではこの日時をあげたうえで、撰者四人に命じて「万葉集に入らぬ古き歌、みづからのものを奉らしめ給ふ」（仮名序）という。ただし、これが、命を下したときなのか、編纂し終えて「古今和歌集」を天皇に奏覧したときなのかで説が分かれている。最近では片桐洋一「古今和歌集全評釈」（平成十年、講談社）などが奏覧時説に立っている。ただし、集中には延喜十三年に詠まれた和歌も収められているから、この説を採る場合は、原稿本が増補改訂版だとみなすことになる。下命時説の場合、完成奏覧の時日がさらに問題となり、諸説〔延喜十三年三月～十四年八月の間（久曽神昇説）など〕がある。「古今和歌集」の和歌の特色は、しばしば知巧的、観念的などと言われるが、それは、頭でこしらえたもの、と見るべきではない。自然や人生を、都市貴族である自分たちに相応しい、洗練された優美な言葉の中に収めようとする意欲の現れであると解しうる。本集で確立された表現様式は、後世の和歌の範とされ、また整然とした体裁は基準としてその後の勅撰集にも踏襲された。

参考文献

❊教師用

▽注釈書

新日本古典文学大系「古今和歌集」　小島憲之他　岩波書店　平元
新編日本古典文学全集「古今和歌集」　小沢正夫他　小学館　平六
新潮日本古典集成「古今和歌集」　奥村恒哉　新潮社　昭五十三
「古今和歌集全評釈」　片桐洋一　講談社　昭六十三
「古今和歌集」（旺文社文庫）　小町谷照彦　旺文社　昭五十七
和歌文学大系「古今和歌集」　久保田淳他　明治書院　令三

▽入門書・研究案内・辞典

研究資料日本古典文学「和歌」　大曾根章介他編　明治書院　昭五十八
鑑賞日本の古典「古今和歌集　王朝秀歌選」　秋山虔他

「**「うた」をよむ―三十一字の詩学**」小林幸夫他　三省堂　平九
「**和歌大辞典**」犬養廉他編　明治書院　昭六十一
「**歌ことば歌枕大辞典**」久保田淳他編　角川書店　平十一
「**歌枕歌ことば辞典　増訂版**」片桐洋一　笠間書院　平十一
「**古今集の世界　増補版**」（塙選書）小沢正夫　塙書房　昭四十六
「**古今和歌集入門**」（有斐閣新書）藤平春男他　有斐閣　昭五十三
「**王朝和歌の想像力―古今集と源氏物語**」鈴木宏子　笠間書院　平二十四
「**名歌名句大事典**」久保田淳・長島弘明編　明治書院　平二十四
「**和歌文学大辞典**」　古典ライブラリー　平二十六
「**古今和歌集の創造力―古今集と源氏物語**」鈴木宏子　ＮＨＫ出版　平三十

❊生徒用

「**新潮古典文学アルバム「古今和歌集」**小町谷照彦　新潮社　平三
「**和歌文学の基礎知識**」（角川選書）谷知子　角川学芸出版　平十八
「**古今和歌集**」（角川ソフィア文庫　ビギナーズ・クラシックス）中島輝賢　角川学芸出版　平十九
「**古今和歌集**」（ちくま学芸文庫）小町谷照彦　筑摩書房　平二十
「**新版 古今和歌集　現代語訳付き**」（角川ソフィア文庫）高田祐彦　角川学芸出版　平二十一
「**和歌とは何か**」（岩波新書）渡部泰明　岩波書店　平二十一
「**古典和歌入門**」（岩波ジュニア新書）渡部泰明　岩波書店　平二十六
「**和歌のルール**」渡部泰明編　笠間書院　平二十六

品詞分解と現代語訳

（表示は略号で示した。略号については略号一覧参照。）

春立ち　ける　日　詠め　る　　紀貫之
　　タ四・用　過・体　　マ四・已　完・体

袖　ひち　て　むすび　し　水　の　凍れ　る　を　春立つ　今日　の　風　や　とく　　（巻一・春上・二）
　　タ四・用　接助・単接　バ四・用　過・体　　格助・主格　ラ四・已　存・体　格助・対象　　タ四・体　　格助・体修　　係助・疑問（係）　カ四・終

らむ
現推・体（結）

立春の日に詠んだ（歌）

（夏に）袖も濡れ（るほどにし）て両手ですくって飲んだ水が、（冬になって）凍っていたのを、立春になった今日の（暖かい）風が解かしているだろうか。

《主題》

夏から冬へと巡った季節を思い返しながら、春になった喜びを詠んだ歌。

指導上の注意点と発問例

●二六〇ページ

問 ◉**「袖ひちて」（７行目）の歌には、幾つの季節が表現されているか。**

補 答 ３つ。

「袖ひちてむすびし水」＝夏、「水の凍れる」＝冬、「春立つ」＝春。

問 **この歌における作者の感動の中心として、適切なものを次の中から一つ選びなさい。**

語句の研究

●二六〇ページ

6 春立ちける日　立春は、二十四節気による一年の区分の一つ。月の運行を基準とする元日とは異なるので、注意したい。月の満ち欠けは、約二九・五日を周期とする。これを大小の月に分けて一二か月とすると、約三五四日となって、一年三六五日とは合わず、これでは農耕などの基準とはならない。そこで、逆に一年三六五日（の概数三六〇日）を基準として二十四に分け、一五日ごとに節気と中気が交互に来るようにし、二つ一組で一か月に相当させた。これが二十四節気である。節気のほうが、一年の季節感により密着していることは言うまでもない。冬至・春分・夏至・秋分など、今もその名を残す節気・中気もある。

6 詠める　「歌」の語が省略されている。

7 ひちて　「ひち」は「ひたす」などと同根で、「ち」は清音。タ行四段活用の自動詞。「濡れて、ひたって」。「濡らす、ひたす」の意の他動詞はタ行下二段「ひつ」。

7 むすびし　「むすぶ」は、二つの物の両端

(ア) 過ぎ去った季節を惜しむ気持ち。
(イ) 待望の春がめぐり来たことを喜ぶ気持ち。
(ウ) 水遊びに興じた昨夏を懐かしむ気持ち。
(エ) 暖かな春の到来を心待ちにする気持ち。

答 **補** (イ)
過去の助動詞「き」で過ぎ去った夏が、存続の助動詞「り」でつい先頃まで続いていた冬が表現される。そのうえでやはり感動の軸になるのは、季節の推移を経て、現在推量の助動詞「らむ」によって切り取られた、詠歌の現在において今まさに起きているはずの「氷も解け出す」春の到来なのであろう。

問 (1)**「凍れる」（7行目）の「る」、(2)「風やとくらむ」（7行目）の「らむ」を、それぞれ文法的に説明しなさい。**

答 (1)存続の助動詞「り」の連体形　(2)現在推量の助動詞「らむ」の連体形

問 **作者紀貫之の、文学史上の業績を二つあげよ。**

答 ①「古今和歌集」の編者として、日本最初の歌論とも言うべき「仮名序」を書いた。
②日本最初の平仮名による日記「土佐日記」を書いた。

問 **この歌における自然の表現について説明せよ。**

答 **補** 一首の中に、昨年の夏からの一年という時間の経過が凝縮している。
「き」で表現されている以上、夏に袖を濡らして両手で水をすくって飲んだ川なり泉なりで時を過ごしたことはあったのかもしれないが、「らむ」を用いているのだから、その地の現在の様子は眼前にはない想像上のものである。春の喜びを詠むのに氷が解けるという自然現象を題材に選んではいるものの、やはり観念的な自然把握という面は否めない。しかし、その喜びを頂点として、一年の時の流れを短い言葉続きで、あくまで自然物を対象にして表現し得た貫之の技量はやはり特筆に値する。

を絡み合わせて離れないようにする、が原義で、そこから「両手の先を組み合わせる、手ですくう、手ですくって飲む」の意を派生させた。直接体験の過去の助動詞「し」によって、暑い夏の自己の体験を示していると考えることができる。

7水の凍れるを　「水が凍っていたのを」。立春は現在では二月四日頃。まだ水も凍る時期である。この水は、池でも川でもよさそうだが、やはり「山の井」（山中の湧き水）などを想像したい。清らかな湧き水こそこの場合にふさわしいだろうし、何より作者貫之には、「結ぶ手のしづくに濁る山の井のあかでも人に別れぬるかな」（「古今和歌集」巻八－四〇四）の名歌があるからである。夏の間あれほど涼を求めて立ち寄った泉も、冬の間は見向きもされない。そういう、ひっそりとしたわびしげな山中の光景を思い浮かべたい。古来、川・泉・池・海・湖と、水は多く詩歌の素材とされた。これに雨・雪・霰などを加え、さらに雲・霧・霞・露・霜・氷などをも加えれば、水の変転が季節感の根幹を形成していると言っても過言ではあるまい。島国で多雨多湿な日本にとって、水はそれほど身近で重要な存在であった。その水の変化を軸に、一年の季節の変化を見事に形象化したのが、この歌なのである。

7とくらむ　「解かしているだろうか」。「とく」は「解かす」の意のカ行四段活用動詞。「解ける」の意なら下二段動詞となる。「風」が主語なので、ここは他動詞。凍りついた水が今にもゆるみ解けようとする一瞬に、春の訪れへの期待と悦びが、渾然となって表現されている。「礼記」（月令）の「孟春之月、…東風解ノ凍」によるとされる。

作者

紀貫之

「古今和歌集」撰者の一人。生没年未詳だが貞観十（六六八）、十三、十四年生など諸説あり、天慶八（九四五）年または九年に没とされる。紀望行（茂行）の子。「古今集」撰者の一人紀友則の従弟。若くして大学に学び、御書所預から大内記、土佐守などを経て玄蕃頭・木工権頭。従五位上に至る。二十歳過ぎに「是貞親王家歌合」「寛平御時后宮歌合」に出詠して頭角を現す。「古今集」の撰集に当たっては、四人の撰者の中で主導的役割を果たした。延喜五（九〇五）年四月十八日付で執筆された仮名序は、和歌の本質と歴史、撰集の目的と意義が論じられ、歌論の嚆矢として後代に多大な影響を与えた。この頃から貴顕の依頼を受けてしばしば屏風歌（邸宅の調度品である屏風に絵と共に押される和歌）を詠作、その第一人者として晩年まで活躍する。延喜七年、宇多法皇の大堰川御幸に供奉して詠進、「大堰井川行幸和歌序」を奉っている。また、五年間の土佐守赴任を終えて承平五（九三五）年に帰京した後に著された「土佐日記」は、仮名日記・紀行文の先駆けとして、後の女性による日記文学の先駆けとなった。「新撰和歌」の編者でもある。三十六歌仙の一人。家集に「貫之集」がある。「古今集」には一〇二首入集。

鑑賞

この歌に詠まれる景と主体との関係について考えてみよう。この主体が貴族であったとして、寝殿造の自宅で、夏に庭の遣水なり池なりで自ら袖を濡らして水を掬ったり、それをわざわざ歌にしたりするだろうか。そう考えれば、この主体は夏の野外に出ていたものと考えるのがやはり自然であるように思われる。涼を求めて出会ったのが、山中の湧き水でも小川の清流でもよい。それを直接手で掬って飲む－主体の目の前には袖まで濡れた自らの両手のなかの水がある。ところが、その水が凍っている、と続いた刹那、映像は寄りから引きのそれに変わり、主体も景から一度退場し、同時に周囲の緑も人に優しくない冬枯れの寒々としたものへと一変する。続けて立春を迎えた今日このいま、春の風を肌で感じた主体は、何処にいようと、あの夏の水の在処へと再び思いを馳せる。その視点は、今度は春の気配を身近に感じた周囲の景から、再び早春の山野へと一気に転じられることになるのではないか。この歌に展開する景は、そのように一カ所の定点観測によるものではないのだろう。人の視点と時間のとても大きな動きのある変化こそが、この歌の生命線であるように思われるのである。

品詞分解と現代語訳

（表示は略号で示した。略号については略号一覧参照。）

桜の　花の　散るを　詠める　　紀友則

格助・体修　格助・体修　ラ四・体　格助・対象　マ四・已　完・体

ひさかたの　光のどけき　春の　日に　しづ心なく　花の　散る　らむ　（巻二・春下・八四）

（枕）　形ク・体　格助・体修　格助・時間　形ク・用　格助・主格　ラ四・終　現原推・体

桜の花が散るのを詠んだ（歌）

陽の光がのどかにふりそそぐ春の日に、どうして落ち着いた心もなく（桜の）花は散るのだろう。

《主題》

のどかな春の陽射しの中に散る花の風情を詠んだ歌。

指導上の注意点と発問例

●二六〇ページ

問 **作者は花が散るのを見て何を思っているか。**

答 風もなく穏やかな日なのに、どうして花が散るのかと嘆いている。

答 「らむ」は、目の前に見える現象に対して、なぜそうなるのかという原因を推量する意味の助動詞である。ただし、原因そのものを考えているというよりは、ずっと咲いていてほしいと願っているのに、その願いに逆らうように散ってしまうままならなさを嘆いているのである。

語句の研究

●二六〇ページ

9ひさかたの　枕詞。天・空・日・月などに掛かる。ここでは「光」が日光なので、「光」に掛かっている。

9春の日に　「に」は時間を表す格助詞。逆接の接続助詞として、「春の日なのに」と解する説もある。

9しづ心なく　「落ち着いた心もなく」という意味で、桜に心があるかのように擬人化して捉えた表現である。

9花の散るらむ　「らむ」は現在の原因推量の助動詞。風もなく穏やかな風景の中で、桜だけが慌ただしく散り急いで見えるのを、なぜだろうかと嘆いているのであり、その原因を本当に知りたいと思っているわけではない。主格の格助詞「の」を受ける語は連体修飾語となって下の名詞へ掛かっていくのが本来の用法なので、「らむ」は連体形。

作者

紀友則

生没年未詳。おおよそ、斉衡年間（八五四〜八五六）頃の出生で、延喜五（九〇五）年頃没か。三十六歌仙の一人。貫之の従兄。歌才は早くに認められたが、官途は長く思わしくなく無官の時代が続いた。ようやく寛平九（八九七）年土佐掾、同十一年少内記、延喜四（九〇四）年大内記になった。「古今集」撰者の中で最年長であり、歌人としての地位、力量は貫之に匹敵していたので、「古今集」編集の中心的人物だったとみられる。が、撰半ばで退任し、「古今集」成立以前に没したと言う。平明な言葉による清澄な響きの歌が特徴である。家集に「友則集」がある。「古今集」以下の勅撰集に六十六首入集。

鑑賞

「桜の花の散るを詠める」という詞書のある歌である。上の句の「ハ行音」と母音の「ア」が明るい爽やかさをもたらし、一読してまず音の響きの美しさを感じる歌である。明るい春の陽射しの中に散る花びらという情景は、明るさの中に惜春のもの哀しさも感じさせ、その美しい哀しさに酔っているかのように散る花を眺めている作者の姿を彷彿とさせる。友則の代表作であるこの歌も、公任の撰集や俊成の「古来風体抄」などには見えないが、「百人一首」に選び入れられており、定家によって高く評価され有名になった歌であるようだ。

品詞分解と現代語訳

（表示は略号で示した。略号については略号一覧参照。）

題	知ら	ず								よみ人知らず
	知｜ラ四・未	打・終								
五月	待つ	花橘	の	香	を	かげ	ば	昔	の	人	の	袖	の	香	ぞ	（巻三・夏・一三九）
	待｜タ四・体	花橘｜格助・体修		香｜格助・対象		かげ｜ガ四・已		昔｜格助・体修		人｜格助・体修		袖｜格助・体修		香｜係助・強意（係）		
する																
サ変・体（結）																

作歌事情は不明

五月を待っているかのように咲いている橘の花の香を嗅ぐと、昔親しかった人の袖の香りがするよ。

《**主題**》

橘の花の香りを嗅いで、昔付き合っていた恋人を懐かしく思い出した歌。

指導上の注意点と発問例

●二六一ページ

問◉**「昔の人」（3行目）とは、どのような人か。**

補 **答** 昔親しく付き合っていた恋人。

「昔の人」が昔親しかった人であることをまず確認し、それがどのくらいの親密さか、と順次考えさせたい。ヒントは「袖の香」である。ずっと後に袖の香りを思い出すほどなのであるから、よほど相手に接近し、

語句の研究

●二六一ページ

1よみ人知らず　作者未詳の歌であるが、それなら作者については何も記載しない、という方法もあり得るのであって（現に「万葉集」の多くの作者未詳歌は、そういう扱いをされている。）わざわざ「よみ人知らず」と断るのは、勅撰集が天皇に捧げられるもので、その作者を記すことを前提としているからだろう。「古今和歌集」の作者群を時代順に大きく三つに分類すると、「よみ人知らず時代」、「六歌仙時代」、「撰者時代」の歌人群に分かれる。「よみ人知らず」は、すなわち最も古層の時代のもの（全てがそうではないにしても）で、奈良時代の歌も含んでいると見なされる。そして、口伝えで伝承され口誦的な色合いも濃い。当該歌などもその例である。

2五月待つ花橘　橘は実を食用とし、常緑の葉も鑑賞されたので、特に初夏に咲く白い花を強調して「花橘」と言う。「五月待つ」については、「五月を待って咲くものである」という、花橘に冠せられる成句的な言葉と見るのが穏当であろう。その花橘が、早くも咲いているのである。橘と時鳥の深

密着していたこと、それが頻繁だったことが、容易に想像されるだろう。もとよりこの「袖」は衣の換喩（部分をもって全体を表す転義表現）である。香が薫きしめられていたのは、衣全部だろう。だが、「あかねさす」の歌の項でも述べたように、袖は魂の宿る場所でもある。男女が共寝するとき互いの袖を重ね、別れるときは「袖の別れ」などともいう。だから、この「人」はどうしても恋人でなければならない。その香りによって浮かび上がる記憶なのだから、身体的な記憶にほかならない。官能的記憶というべきである。

問 **「花橘の香」と「昔の人の袖の香」との関係を説明しなさい。**

答 昔、作者の恋人であった人が、自分の袖に、橘の花の香りのする香をたきしめていた。

問 **この歌によって、以後「花橘」の香りは何の象徴として人々に捉えられるようになったのか、簡潔に述べよ。**

答 昔を思い出させるもの。

問 **「かげば」（2行目）について、**
[易](1)文法的にどのような条件を表すか、答えよ。
[中](2)前問(1)で答えた条件は、意味上、さらに次の三つに分けられる。「かげば」は、このうち、どの用法と同じか、(ア)～(ウ)の例文を参照して答えよ。
(ア)原因・理由を表す。「風吹けば、え出で立たず。」
(イ)偶然条件を表す。「それを見れば三寸ばかりなる人、いとうつくしうてゐたり。」
(ウ)恒常条件を表す。「命長ければ恥多し。」

答 (1)順接確定条件　(2)(イ)

鑑賞

夏が来て橘の花が咲き始めると、忘れかけていた昔の人の袖の香りがして、ふいに懐かしい記憶がよみがえってくる…。この歌のように、ずっと後になってから、記憶の中の香りがにわかに呼び起こされるような経験はないだろうか。

その実を食用とする橘は、万葉時代から実や葉ついても歌に詠まれてきたものの、『古今和歌集』以後は初夏に咲く「花橘の香」い関係（時鳥は橘に好んで宿りをする）をもとに、「時鳥のやって来る五月を待っている」と解する説もある。

にほとんど限定されてしまい、当該歌によって、単に季節感のみならず、過去の追憶・回想の表象として機能するのが定型化していく。『新古今和歌集』の藤原俊成の歌（↓二六三ページ）はこの歌を本歌取りしたものである。

もとより嗅覚は視覚や聴覚と違って、扁桃体と海馬という記憶と感情を処理する部位に直接的に接続される。そのため、何らかの香りがトリガーとなり、ずっと忘れていたはずの記憶でも突然強く鮮やかによみがえってくることもあるらしい。記憶と分かち

がたい香りの経験は、極めて個人的なものになろうが、逆にその経験が、この歌にいうところを実感させてくれるかも知れない。

〈参考〉『伊勢物語』六十段

むかし、おとこ有けり。宮仕へいそがしく、心もまめならざりけるほどの家刀自、まめに思はむといふ人につきて、人の国へいにけり。このおとこ、宇佐の使にていきけるに、ある国の祇承の官人の妻にてなむあると聞きて、「女あるじにかはらけとせよ。さらずは飲まじ」といひければ、かはらけ取り出したりけるに、さかななりける橘をとりて、

五月待つ花橘の香をかげばむかしの人の袖の香ぞする

といひけるにぞ、思ひ出でて、尼になりて、山に入りてぞありける。

品詞分解と現代語訳

（表示は略号で示した。略号については略号一覧参照。）

秋立つ　日、詠める　　藤原敏行

秋来　ぬ　と　目に　は　さやかに　見え　ね　ども　風の　音に　ぞ
カ変・用　完・終　格助・引用　格助・場所　係助・区別　形動ナリ・用　ヤ下二・未　打・已　接助・逆確　格助・体修　格助・理由　係助・強意（係）

おどろか　れ　ぬる
カ四・未　自・用　完・体（結）

（巻四・秋上・一六九）

立秋の日、詠んだ（歌）

秋が来たと目にははっきり見えないけれども、風の音で（秋が来たと）気づいたことだよ。

《主題》

風の音に僅かに発見した秋らしさを喜ぶ歌。

指導上の注意点と発問例

●二六一ページ

問　この歌はどのような日に詠まれたか。

補　答　立秋の日

詞書には「秋立つ日、詠める」とある。立秋は現在の新暦では八月七日前後だが、まだ夏の真っ盛りといってよい時期に、どうして秋を発見できるのかということを考えさせ、古人の季節感を実感させたい。我々は涼しいと感じることが何度か繰り返され、視覚にも聴覚にも用いる。もとよりこの場合は、視覚的に秋の訪れを示すものは何もないが、という意味だが、一方「風の音」の「さやさや」という音を暗示している効果を持つ。目に見える秋といえば、木々の黄葉や草木に置く露などがあるが、それに先立って、風の音が秋を知らせるのである。

5風の音　風そのものではなく、風の音であることに注意したい。秋の風は、肌にしみいるように吹く。しかしまだそこまでの風ではない。それでも、夏のぬらりとした風とは明らかに違うものが耳に聞き取れたのである。さらに、文学的知識として、秋は

語句の研究

●二六一ページ

5秋来ぬと　「秋立つ日、詠める」という詞書から見て、「二十四節気の暦の上では秋になったというが」のニュアンスがこもると判断される。「ぬ」は完了の助動詞の終止形。

5目には　「には」は手段の格助詞「に」＋強調の係助詞「は」から成る連語。

5さやかに　形容動詞の連用形。「さやかなり」は「冴ゆ」と同根の語で、くっきりと際立ち、はっきりとしているさまを表し、

その比重が大きくなって、やっとああ秋だと感じるが、古人は、ほんの僅かの兆しにも秋を発見するのである。そこには、京都盆地の厳しい夏を忌避するゆえの秋への期待感があり、また、季節とはこうあるべきという願望もあるに違いない。立秋は、二十四節気による一年の区分による。「二十四節気」については「袖ひちて」歌語句の研究「春立ちける日」の項参照。

問　「見えねども」（5行目）の「ね」を文法的に説明せよ。

答　打消の助動詞「ず」の已然形

問　「おどろかれぬる」（5行目）について、

(1)「れ」を文法的に説明せよ。
(2)「ぬる」を文法的に説明せよ。
(3)風の音で何に「おどろ」いたのか、歌の中から抜き出して答えよ。
(4)「おどろかれぬる」を現代語訳せよ。

答　(1)自発の助動詞「る」の連用形　(2)完了の助動詞「ぬ」の連体形　(3)秋来ぬ（と）　(4)気づいたことだ

涼風から始まるというものもあった。「いつもきく風とはきけど荻のはのそよぐ音にぞ秋はきにける」（「古今和歌六帖」紀貫之）、「夏と秋行きかふ空のかよひぢはかたへすずしき風やふくらむ」（「古今和歌集」夏・凡河内躬恒）、「にはかにも風のすずしくなりぬるか秋立つ日とはむべもいひけり」（「後撰和歌集」秋・よみ人知らず）。

5 おどろかれぬる　「おどろか」はカ行四段動詞の未然形。この「おどろく」は、「驚く、びっくりする」と現代語訳すると、ややニュアンスが異なってくる。現代語の「驚く」は、びっくりした後、平静を失って動揺することを含意するが、ここではむしろしみじみとした喜びを噛み締めている。ゆえに、「はっと気づく」という訳語がふさわしい。「れ」は自発の助動詞「る」の連用形。何かを発見しようと身構えていて気づいたのではなく、自然と気づいたのである。「ぬる」は完了の助動詞「ぬ」の連体形（「ぞ」の結び）。助動詞「る・らる」に完了の助動詞が続く場合、「つ」ではなく、無作為的・自然推移的な動詞・助動詞に付く「ぬ」が来るのが原則である。

作者

藤原敏行

生年未詳。没年は延喜元（九〇一）年とされるが、延喜七（九〇七）年とも。父は富士麿、母は紀名虎（きのなとら）の娘。敏行の妻が在原業平の妻の妹であったことから、業平らと親しかった。「寛平御時后宮歌合（かんぴょうのおおんときのきさいのみやうたあわせ）」などに出詠している。能書家としても有名であった。家集に「敏行集」がある。三十六歌仙の一人。

鑑賞

この歌は、秋歌上の巻頭歌（巻の最初の歌）である。夏歌の最後が語句の研究でもふれた、「水無月の晦日の日、よめる」という詞書を有する凡河内躬恒の、

夏と秋と行きかふ空のかよひぢはかたへ涼しき風や吹くらむ

と、暦のうえでの夏と秋との物理的境界が上空に存在するかのようなまったくもって観念的な捉え方であるのに対し、こちらは風の音によって季節の変化を体感したと詠むところが興味深い。

言われてみれば、秋の気配はもとより目にはっきりと見えて察知されるようなものではないのではなかったか。「過ごしやすくなりましたね」という定型的な挨拶もあるように、個人差はあるにせよ、秋の到来は皮膚感覚によって把握されるものというのがやはり一般的なのだろう。たしかに立秋になった途端に涼しい風が吹き始めるという歌は枚挙に暇もないほど残されているわけであるが、そういう都合のいい型通りの捉え方ではなく、耳で変化の兆しを捉えた敏行の感性は、現代人からしても、実は新鮮なものではなかったかとも思われるのである。

品詞分解と現代語訳

（表示は略号で示した。略号については略号一覧参照。）

ちはやぶる	神代（かみよ）	も	聞（き）か	ず	竜田川（たつたがは）	から紅（くれなゐ）	に	水（みづ）	くくる	と	は
（枕）		係助・同類	力四・未	打消・終			格助・状態		ラ四・終	格助・引用	係助・提示

神代の昔にも聞いたことがない。竜田川では美しい紅色に水を絞り染めにするとは。

（巻五・秋下・二九四）　在原業平（ありはらのなりひら）

《主題》

竜田川の川面を流れる紅葉を、鮮やかな紅色のくくり染めに見立て、擬人法によってそれは竜田川のしたことだと言ってみせることで、その筆舌に尽くしがたい美しさを称えた歌。

指導上の注意点と発問例

●二六一ページ

問 **句切れを答えよ。**

二句切れ。

語句の研究「神代も聞かず」の項を参照。

答 問 補 答 問 **から紅とは、何の、どのような様子か。**

竜田川が降り敷く紅葉によって、深紅に染まっているかのように見える様子。

補 語句の研究「から紅」「くくる」の項も参

語句の研究

●二六一ページ

7ちはやぶる　「神」にかかる枕詞。古くは「ちはやふる」と清音でいった。この歌のように神を含む語に接続したり、神の語を直接含まなくても神に関わる事物（斎垣、天の岩戸など）に接続したり、特定の神社やその所在地（賀茂の社、布留など）にもかかることもある。

7神代も聞かず　「神代の昔から聞いたことがない」の意味。「神代」は、神々の時代、つまり、人の世をはるか遡り、神々が国造りをし、統治していた時代のことをいう。『古事記』『日本書紀』では、天地開闢から神武天皇以前の時代のこと。「ず」は打消の助動詞の終止形で二句切れ。

7竜田川　奈良県生駒郡にある立田山のほとりを流れる川。紅葉の名所として知られる。

7から紅（くれなゐ）　鮮やかな紅色。大陸から渡来したところから、「から（唐または韓）」が接頭語のようなかたちで美称として用いられた。

7くくる　主語は竜田川で擬人法。「くくる」はくくり染め（絞り染め）にすること。「くくり染め」とは布の所々を糸でくくって、そこを白く染め残して模様を出す染色法、また、その模様のことをいう。「括る」とも書く。流れる紅葉の様子を竜田川が紅色にくくり染めにしたと見立てている。

照のこと。「くくる」の解釈には鑑賞にも述べられるように諸説あるものの、少なくとも竜田川を紅葉が赤くしていることを踏まえて詠んだ歌であることは疑いない。

作者

在原業平

天長二（八三五）年～元慶四（八八〇）年。五十六歳で没。平安前期の歌人。平城天皇皇子阿保親王の五男。権中将まで至ったので、在五中将・在中将などと呼ばれる（「在」は臣籍に降下して賜った姓の「在原」を表す）。兄、行平も有名な歌人。「日本三代実録」卒伝には、「業平は体貌閑麗、放縦にして拘らず、略ぼ才学無く、善く倭歌を作る」とある。容貌美しく、自由奔放な性格で、才学には乏しいが、歌がうまいというのである。また、「古今和歌集」仮名序の「その心あまりてことば足らず」という紀貫之の評言からも、情熱的な歌人であったことが知られる。このような業平の実像が、情念のほとばしり出るような彼の恋歌を中心に増幅され、虚構化・物語化され彩られていくことによって、「伊勢物語」の「昔男」に擬せられるような、好色者・みやび男の像となっていく。六歌仙および三十六歌仙の一人。

鑑賞

末次由紀氏の漫画『ちはやふる』によって、競技かるたとしての『百人一首』の代名詞ともなった歌である。末の句「くくる」の清濁が解釈も含めて問題になる。

実は、藤原定家による『古今和歌集』の注釈書『顕注密勘』以降、中世では「潜る」と詠んで、下の句を「紅葉の散り敷く川面の下を水が潜って流れる」とするのが解釈の主流であった。ところが江戸期になって賀茂真淵『宇比麻奈備』が、古説や古歌など多くの論拠から「括る」説を優勢として、これが支持されるかたちで現在に至っているのである。ただし、近年、真淵の示した論拠も不確かであることが古歌の再検討や服飾史の面から明らかにされている（森田直美『水は括られたのか―在原業平「唐紅に水くくるとは」の清濁―』）から、下の句の解釈は依然として決着が付いたとは言い難い大きな問題なのである。

『古今和歌集』の詞書によれば、この歌は屏風歌（大和絵の屏風に和歌をつけたもので、九世紀の末から始まり、十世紀には盛んに詠まれるようになった）であったらしい。「神代も聞かず」という大袈裟な驚きには、この絵あるいはこの絵の持ち主に対する何らかの祝意も込められているのではないかと思われるのだが、肝腎のこの絵についての詳細は現在伝わらない。このように、広く知られていながらも、依然として多くの課題を残した歌なのである。

品詞分解と現代語訳

（表示は略号で示した。略号については略号一覧参照。）

冬（ふゆ）の　歌（うた）　と　て　詠（よ）め　る　　源宗于（みなもとのむねゆき）

格助・体修　格助・引用　マ四・已　完・体

山里（やまざと）　は　冬（ふゆ）　ぞ　寂（さび）しさ　まさり　ける　人目（ひとめ）　も　草（くさ）　も　かれ　ぬ　と　思（おも）へ　ば　（巻六・冬・三一五）

係助・提示　係助・強意（係）　ラ四・用　詠・体（結）　係助・列挙　係助・列挙　ラ下二・用　完・終　格助・引用　八四・已　接助・順偶

冬の歌として詠んだ（歌）

山里は（いつも寂しいが）冬が（なんといっても）寂しさがまさることだよ。人の訪れも絶えて離（か）れてしまい、草も枯れてしまうと思うと。

《主題》

賞でるべき草花も枯れ果て、訪ねてくれる人もいなくなった冬の山里の寂しさを詠んだ歌。

指導上の注意点と発問例

●二六一ページ

問　**「かれぬ」（9行目）の「ぬ」を文法的に説明せよ。**

答　完了の助動詞「ぬ」の終止形

問　**「人目も草もかれぬと思へば」（9行目）を、掛詞に注意して現代語訳せよ。**

答　人の訪れも絶えて離れてしまい、また、草

語句の研究

●二六一ページ

9 山里　山の中で、しかも人の住んでいる所。貴族は基本的に都市生活者なので、山里に住むということは、貴族生活から何らかの意味で距離を置いている状態を表す。貴族生活の中での憂悶や喧騒、疲弊などを離脱することを可能にする場所でもある。世の憂さから脱することができるのである。しかし、山中の自然は厳しい。冬は長く、寒気はいよいよ強い。孤独感もつのる。しかしまた、四季のとりどりの季節感は都よりはるかに鮮明で、それが静寂な環境とあいまって、ささくれ立ち、疲れきった心を癒しもする。そういう正負両面を「山里」は抱え込んでいる。当該歌は、その負の面を強調したものだが、しかし、山里を嫌悪しているとは言えないのであって、厳しい環境ではありながら、自然に抱かれている安らかさもまた、背景にはあるのである。

9 人目　辞書類には、「人目」に「他人の見る目」のほかに、「人の出入り」などの意味を掲出していることがあるが、「人目」

も枯れてしまうと思うと。

問 **「かれ」（9行目）の掛詞を用いることによって、どのような表現効果がもたらされているか。**

答 草木が枯れた寂しさと、人が訪れない寂しさを、一体のものとして感じ取らせる効果がある。

問 **「冬ぞ」（9行目）の「ぞ」という係助詞には、作者のどのような気持ちが込められているか。**

答 山里は、常に寂しいものではあるが、特に冬こそが最も寂しくなるのだと強調しようとする気持ち。

問 **上の句と下の句との表現上の関係は、どうなっているか、一語で答えよ。**

答 倒置

補 掛詞とは、同音異義語の多い日本語の特性を生かして、二種の語を重ね合わせる技法である。それぞれの語は、それぞれの文脈を歌中で担っているから、掛詞によって、二つの文脈が一体不可分のものとして、形成されることになる。重要なのはその掛詞の両義のうち、一方が物象（物体や現象）にまつわる物であることが多く、もう一方が心情に関わる観念であることが多いことである（鈴木日出男「古代和歌史論」）。それによって、ある空間におけるある心情が、人間生活の動かし難い事実として、言葉の上で実現する。この場合でいえば、「枯れ」が物象関係、「離れ」が心情関係である。この両義が、掛詞で合体することによって、草木も枯れ果てた寂しい山里で、人に見捨てられてしまったと感じる孤独が、不可避の事実として実感されるのである。

作者

源宗于

生年未詳〜天慶二（九三九）年。光孝天皇皇子是忠親王の男。生涯官職に恵まれず、不遇をかこつ歌が多い。家集に「宗于集」がある。三十六歌仙の一人。

鑑賞

『百人一首』が古典和歌を学びはじめるきっかけになっているとしたら、修辞技法としての掛詞の面白さと最初に出会った作品として、この歌を記憶しているという人も少なくないのではなかろうか。「離れ」という古語は、和歌では男女が疎遠になることをもいうのであるが、この歌を通して、冬の山里に「訪れる人がいなくなる」という状況をいう語としてインプットされるところそのものに来訪の意があるわけではない。ここでも「人目離る」で、「人が自分を見なくなる」の意から「訪れる人がいない」という状況を指すようになるのである。そう言うときの「目」は、「目をかける」などというときの「目」に近い。

9かれ 「離れ」は、本来密着していたものが、別々になり距離ができることをいう。特に和歌では、男女が疎遠になることに用いる。ここでも、男に見捨てられた女の口吻をかりて、孤独感を吐露している、と見ることができる。

がまずはスタートラインになるのかもしれない。こうした和歌を起点にして、なるべくたくさんの古語に出会って、少しずつ確実に様々な作品の理解に繋げていってほしいものである。

品詞分解と現代語訳

（表示は略号で示した。略号については略号一覧参照。）

題知らず　小野小町

思ひ	つつ	寝れ	ば	や	人	の	見え	つ	らむ	夢	と	知り	せ	ば
八四・用	接助・継続	ナ下二・已	接助・順理	係助・疑問（係）		格助・主格	ヤ下二・用	完・終	現原推・体（結）		格助・引用	ラ四・用	過・未	接助・順仮
覚め	ざら	まし	を											
マ下二・未	打・未	反仮・終	間助・詠嘆											

（巻十二・恋二・五五二）

作歌事情は不明

（ひたすら恋しいあの人のことを）思いながら寝たので、あの人が（夢に）見えたのだろうか。夢だと分かっていたならば、目覚めないでいたのに。

《主題》

夢の中で見た、現実には逢えない恋人の姿を、夢が覚めてからせつなく恋い慕った歌。

指導上の注意点と発問例

●二六一ページ

問 ◉「思ひつつ」（11行目）とあるが、何をか。

答 恋しい相手のこと。「思ふ」は恋の思い悩みであることが多い。「つつ」は反復・継続の接続助詞。かなわぬ恋の相手のことを、しきりに考えながら寝入ったのである。

問 「見えつらむ」（11行目）を現代語訳しなさい。

語句の研究

●二六一ページ

11思ひつつ　「つつ」が動作の反復、継続の接続助詞であることに注意する。何度も、しきりに、恋しい人のことばかり考えて眠りについたのである。というより、一晩中恋人のことをあれこれ考え続け（恋人のことをいろいろな面から想起した、というのではない。かなえられぬ恋ゆえに、ああでもない、こうしても駄目、でも…と、現実の壁にぶつかりながら、堂々巡りの激情をもてあましているのである。）、とうとう疲れ果てて、我知らず眠ってしまったのであろう。転寝である。そういう眠りは熟睡しきらない浅いものにちがいない。夢も見ようというものだ。

11寝ればや　ナ行下二段動詞「寝」の已然形に、順接確定条件（原因・理由）の接続助詞「ば」、疑問の係助詞「や」が付いたもの。「寝たので、…（なのだろう）か」の意。

11夢と知りせば覚めざらましを　「せ」は過去の助動詞「き」の未然形としておくが、

い。

答 見えたのだろうか。

補 「見え」はヤ行下二段動詞「見ゆ」の連用形、「つ」は完了・強意の助動詞の終止形、「らむ」は現在の原因推量の助動詞の連体形（係助詞「や」の結び）。「見え」「つらむ」ではなく、「見えつ」「らむ」と切って考えたほうがよい。まず、夢に恋しい人の姿が見えた（「見えつ」）という完了した事実があり、その原因が、あの人のことを考えながら寝たから（「思ひつつ寝れば」）であろうか（「や」）と推量した（「らむ」）のである。

問 上の句について、何を「思ひつつ」なのか、「人」（11行目）とはどのような人なのかを明らかにして現代語訳せよ。

答 ひたすら恋しい、あの人のことを思いながら寝たので、あの人が夢に見えたのだろうか。

問 下の句について、「せば…まし」は反実仮想を表すが現実にはどうであったのか、説明せよ。

答 夢だとは分かっていなかったので目覚めてしまった。

問 「古今和歌集」には、この歌に続き、小野小町の次の歌が収められている。両歌に共通する点を説明せよ。

うたたねに恋しき人を見てしより夢てふ
ものは頼みそめてき

答 両歌とも恋心と夢を主題として詠んでおり、はかない夢を頼りにするしかないほど、恋心がせつないものであることが伝わってくる。

補 「鑑賞」参照。

サ変動詞の未然形と見なす見解も有力である。「を」は間投助詞だが、「…のに」という逆接的なニュアンスがこもる。「…せば…まし」の反実仮想の構文が、何よりもここでは重要。現実に反することを仮に想像するのが反実仮想だから、現実の状況は逆なのであって、まずそれをはっきりと認識したい。実際には夢を見ているとき、それが夢であると分からなかったので、目覚めてしまった、という嘆息がそこには込められている。そして、この反実仮想にこそ、小町の独自性が光る。相手のことを思いながら寝たから相手が夢に見えた、という発想は「万葉集」にも見られ、さほど珍しいものではないが、夢のはかなさを知り抜きつつ、そこにでも希望をかけていくほかない、とするところにこそ、彼女の本領がある。それは、絶望に胸を締めつけられながら、仮定の世界に全身を委ねようとする、閨秀詩人ならではの強烈なロマンチシズムである。こういう恋の相手は、やはり手の届かない高貴な男性を想像するべきであろう。

作者

小野小町

生没年未詳。その生涯はさまざまな伝承を生み、謎に包まれている。仁明朝（八三三〜八五〇）の頃活躍したか。恋歌に特色を見せる。家集に「小町集」がある。六歌仙および三十六歌仙の一人。

鑑賞

「せめて夢のなかでだけでも会えたら」という思いは、千年を超える昔から変わらない。現実的には成就するはずのない恋―それを頭では分かっていたとしても、いざ相手が夢のなかに本当に現れてしまったら、夢だなどとは思いもしない。それが恋する者の真実なのだと、この歌は教えてくれている。

『古今和歌集』恋二の巻頭歌であるこの歌には、同じく小町による、夢にまつわる恋の歌がさらに二首続いていて、

うたたねに恋しき人を見てしより夢てふものは頼みそめてき
いとせめて恋しき時はむばたまの夜の衣を返してぞ着る

これらを順に見ていくと、「見えつらむ」と一度でも夢で逢えてしまうと、「頼みそめてき」とはかなくあてにならない夢を頼りにしてしまうようになり、ついには「夜の衣を返して」着るという、俗信による呪的な営みによって、人為的に夢での逢瀬を実現させようと試みるまでに至るというのである。これら三首は、夢にすがる主体の心の動きを、そのまま垣間見せるかのような並びになっている。現代人ならば、心理学や仮想現実の構築によって、より合理的に同じようなことを実現させようと考えるのかもしれないが、恋する者の願望としての本質的なところは、実は千年前と少しも変わっていないのではなかろうか。

品詞分解と現代語訳

（表示は略号で示した。略号については略号一覧参照。）

五節（ごせち）の　舞姫（まひめ）を　見（み）　て　詠（よ）める　　良岑宗貞（よしみねのむねさだ）

格助・体修　格助・対象　マ上一・用　接助・単接　マ四・已　完・体

天つ風（あまつかぜ）　雲（くも）の　通ひ路（かよひぢ）　吹きとぢよ　乙女（をとめ）の　姿（すがた）　しばし　とどめむ　　（巻十七・雑上・八七二）

格助・体修　格助・体修　ダ上二・命　副　マ下二・未　意・終

五節の舞姫を見て詠んだ（歌）

大空を吹く風よ、雲の中の通い路を閉ざしておくれ。天女の姿をもうしばらく（地上に）留めておこう。

《主題》

天女と見まごうほどに美しい五節の舞姫の姿を詠んだ歌。

指導上の注意点と発問例

●二六二ページ

問 **作者が「乙女の姿しばしとどめむ」（8行目）と思ったのはなぜか。**

答 美しい少女の姿を、少しでも長く見ていたいと思ったから。

補 五節の舞姫は美しい少女が選ばれ、衣装もそれぞれ華やかさを競ったので、その姿はたいへん優美なものであったようだ。それはこの世のものとは思えず、まるで天女のようだったので、天へ帰ってしまわないように、帰り道を閉ざしてしまいたいと詠んだ。五穀豊穣を祝い、酒宴が張られた。天武天皇が吉野へ行幸した折に、天女が舞い降りたという伝説が五節の舞の起源となったので、それを踏まえた表現である。

語句の研究

●二六二ページ

2天つ風　大空を吹く風。ここでは、大空を吹く風と呼びかけている。「つ」は上代の格助詞で連体修飾の「の」と同じだが、中古以降は複合語の中で慣用的に用いられるだけになった。

2雲の通ひ路　雲の中にあると考えられていた、地上から天へ通じる道。

2乙女　五節の舞姫のこと。「古今集」詞書に「五節の舞姫を見てよめる　よしみねのむねさだ」とある。五節の舞は、陰暦十一月に宮中で行われる新嘗祭の豊明節会に、貴族の未婚の娘が選ばれて舞姫になった。

だのである。

問　**「古今和歌集」の歌集の表現の特徴をまとめよ。**

答　題材は貴族の美観に即したものに限られ、繊細で優美であり、理知的、観念的な屈折をもつ表現が主流。調べは七五調が基本で、三句切れが多い。縁語・掛詞が効果的に用いられている。技巧的・観念的に傾く傾向は後世に批判の対象ともなるのだが、貴族たちは洗練された優美な言葉続きによって歌を練りあげることを求め続け、その精神を大切にしていたらしい。また、技巧としての掛詞や縁語の流行は、仮名の発明によって言葉の結び付きの不思議さや面白さに気付いた人々の喜びを起点とする。「古今和歌集」は日本の知的表現形式の基盤のような存在なのである。

作者

良岑宗貞

弘仁七（八一六）年〜寛平二（八九〇）年。六歌仙の一人。出家して遍昭と名乗る。桓武天皇の皇孫。大納言良岑安世の子。素性・由性の父。良僧正・花山僧正とも呼ばれる。仁明天皇に仕え、嘉祥二（八四九）年蔵人頭となったが、翌三年、天皇が崩御すると、比叡山で出家した。時に三十五歳。慈覚大師・智証大師の教えを受け、雲林院に住した。仁和元（八八五）年僧正となり、光孝天皇の信任が深かった。后藤原高子の陽成天皇御産のとき請願して花山に元慶寺を創建し、また、七条起請を下して僧の規律を正すなどの功績があった。勅撰集には「古今集」以下に三十六首入集。仮名序で「歌のさまは得たれども、まこと少なし。たとへば絵に書ける女を見て、いたづらに心を動かすがごとし。」と評されるように、機知に富んだ着想のおもしろさが特徴である。

鑑賞

「古今集」序文では、宗貞は「まこと少なし」と言われている。この歌も「雲の通ひ路吹きとぢよ」というのが伝説を踏まえたものとはいえ大げさで、華やかな情景であるだけに作り物めいたものが感じられるのであろう。しかし、この歌そのものが「まこと少なし」と言われているわけではないし、当時の男性が抱いた五節の舞姫への憧れの気持ちを思うと、この程度の誇張表現は許されてよいかと思う。明るい華やかな歌いぶりが、百人一首中の有名歌となっているゆえんであろう。出家前の三十歳代に詠んだものである。